

「胸こそ踊れ此盆前」考

――『本朝二十不孝』の方法と「家業」――

大久保 順 子

貞享三年（一六八六）刊の浮世草子『本朝二十不孝』は「孝道奨励の風潮、『二十四孝』を始めとする孝子説話集の流行を横目でにらみつつ編まれた、不孝者を主人公とする二十の短篇説話集¹⁾」といわれる。二十話のうちの一つ、巻五の一「胸こそ踊れ此盆前」の場合も、多くの先行研究が本話の「不孝者」像に注目し、「筑前の国」の「舟のり」辻屋長九郎の後家一家の貧窮生活における、妹娘小さんの「不孝」話として論じている。その「小さんの不孝」をめぐる作品の出来栄えと評価については諸説あり、絶えず「テキストの読み直し」が図られる西鶴浮世草子研究の中で、本話巻五の一の考察もまた、作品の再評価を試みる方向で展開されている。

本論では先行研究の指摘を参照しつつ、本文の解釈と表現の問題、また本作品の「序文」の暗示していた視点をもち考慮しながら、巻五の一とは何が造型され、読み手に何が示されているテキストなのかについて、考えてみたい。

一、不孝譚か孝行譚か——先行研究の指摘と問題点

本話を批判的に評価した論考の代表的なものとして、森銑三の指摘がある。

これもまた単純な話で、老母に誠を以て仕へる嫁女と、老母は自分の産みの親でありながら、邪慳に当る娘とを対立的に描いて居り、最後に嫁女の亭主即ち老母の産んだ長子が旅から帰つて来て、妹を家から追出して、一家を円満ならしめたといふので話は終つてゐる。この話も作者の書き方が粗雑で、娘と本気で争つたりする老母が、痴呆性なのだらうかと思はれるやうな扱ひ方がしてあるのだから、問題にならないが、もしこの老母が人並みの女だつたとしたら、たとへ不孝者にもせよ、追ひ出された娘の上を案じて、心は休まらなかつた筈であらうし、老いたる母にさうした思をさせることに於て、長子の執つた処置も、当を得たものとはいひ難い。作者は老母と同時に、その長子をも描き得てゐない。二十不孝の作者は、生きた人間を描かうとしてゐないし、また描くだけの技倆を持つてもゐなかつた。(『教訓文学二十不孝』²)

森は『本朝二十不孝』の「非西鶴作」説の論点から本話巻五の一を例示し、「書き方が粗雑」「生きた人間を描かうとしてゐない」とする。この批判の一方で、二十世紀後半の『本朝二十不孝』研究動向としては、徳田進『孝子説話集の研究 近世篇』³が本作品の『二十四孝』の逆設定³趣向説を掲げて以降、現在まで多くの諸論考が孝子譚の逆設定説を踏まえつつ、本作品の読みと再評価を試みている。作品の意図が教訓的か戯作的か、等の諸々の見解が呈示される議論では、本作品が「西鶴作品中にあつて、とりわけ解釈や評価が分かれる作品である」⁴ことが浮き彫りになってきている。そこで巻五の一「胸こそ踊れ此盆前」の問題点を、先行研究論の「解釈や評価」の分かれ方から確認しておきたい。

『本朝二十不孝』の各話の孝子譚の逆設定を論じた佐竹昭広⁵は、巻五の一を『二十四孝』の張孝張礼、老萊子の逆設定の話とし、『本朝孝子伝』今世の孝子「中原休白」から「筑前を意識」⁶としての造型、とする。

井上敏幸『本朝二十不孝』の方法⁶はさらに、『二十四孝』説話の逆・順の設定が、演劇的着想によつて生かされ

たもの、または、演劇的手法によって生かされたと思われる作品」のうち、巻五の一を「『二十四孝』説話の順用を、演劇的手法に託した一篇だと解される」とした。井上は、前掲の徳田の「伯兪型の逆・反泣杖譚」趣向説に対し、この一篇における不孝娘さんの位置は、むしろ脇役であり、主人公は惣領長八の娘の孝行譚にある。この孝行娘の造形には『二十四孝』唐夫人説話の順用が考えられるが、西鶴が意を用いた点は、娘・娘の孝と不孝の対照的描写にあったのではなく、『二十四孝』蔡順説話に依る借金取の奇跡的行為の描出にあったのである。とする。催促で凄んでいた掛乞が嫁の孝心に感心して金を置いて帰るという「商人のまさに奇跡的な急変」が、赤眉の乱の盜賊が蔡順の孝に感じて米と牛の足を与えて去ったという「蔡順説話」からくるもので「一篇の眼目」であり、「観客にはその人物の存在を知らせながら、ドラマの中心人物達には気付かせないままにドラマを進行させ、或時点において突如その人物をドラマの中心へ投込むことによって」「更にドラマティックなものにする」「演劇的手法」と評価した。これは「はなし」そのものの戯作性を評価する視点ともみられる。

平林香織『『本朝二十不孝』に描かれた孝』⁷⁾も巻五の一を「孝を志向した話」とみており、一家の経済的貧窮の原因は「波の上の仕合せだめがたく」という辻屋の「運命的なもの」にあり、小さんの不孝（借金による母の心労をよそに行っていた踊の稽古を母に非難され、雪踏を母に投げつける点）そのものは貧窮の原因ではない、とする。平林は「不孝が孝を描くための契機となっている」話とし、孝行者が幸を獲得する「より達成が困難な嫁の姑に対する孝」の具現化が強調され、末尾の祝儀が「嫁の孝」を称える点に、孝行譚としての志向性を認めている。

これらの孝行譚の解釈に対して、一見問題解決的にみえる結末に疑義を呈する論考もある。

大塚健臣『『本朝二十不孝』巻五試論』⁸⁾は、巻五の一の小さん・嫁を比較する母の「その判断は恣意的な視線によるものである」特異さと、（孝行譚で最も非現実性の際立った「唐夫人」の典拠から）いかにも女性教訓書的な理想像としての「本話の嫁の行為にも現実感を感じられない」点を指摘する。母親の「饒舌な」「愚痴」発言の中の「煎茶」「煙草」に「道楽」「自堕落」さすら読みとる大塚は、巻五の読者が「不孝者の性質が、他ならぬ親から受け継いだものであることを確認することになる」上に、「呆れた親子の話」が「作品集全体の枠組みをも、はぐらかす」

と、辻屋の母と娘と嫁それぞれに批判的な観方を示す。

早川由美『本朝二十不孝』の不孝娘譚——娘と世間をめぐる——^⑨は「はつきりと娘の不孝を中心とする一の三、二の二、三の一、五の一の四章」のうち、巻五の一の不孝娘と孝行嫁の対比から、母親を養うために必要な「兄の長八と聲」「金を持って嫁に来た嫁」「そうした必要性からはじき出されたところにいるのが娘小さん」である点に注目する。「世間を代表する掛乞から視れば、不孝な娘にしか見えない」上、「兄嫁と異なり、金に変えることができる道具があるとは考えにくい」妹娘小さんは、「夫すら彼女の味方ではなく」「不孝」とされる、と指摘する。総じて本作品の、結婚しても「嫁として成長し、世間の予定調和内へ入っていけない」、あるいは無自覚にせよ「一人前になることや働き手になることを拒否している」不孝娘たちについて、早川は「時代が生み出した娘像」の共通項を見出し、巻五の一の場合は

・ 母親の愚痴を聞き続け、いつ来るかわからない金をただじっと待つことだけが彼女の仕事になる。その彼女の楽しみが盆踊りだったとしたら、掛け乞いが去った後で明日の踊りのならしをすることを非難することはできない。^⑩

・ 一人の不孝が一家の不孝になっていくのは世間がなすわざである。それを避け一家を守るためには、五の一のように、不孝な娘を排除していく方法しかない。

として、「親と娘と世間という三者の関係から生み出される」不孝、そして「実は「普通の人」には孝行は難しい」という、『本朝二十不孝』序文の「孝を尽せる人常也」とは逆説的な法則性をも指摘している。

不孝譚と考える場合においても、立道千晃『本朝二十不孝』の孝道観——同時代意識からの再検討——^⑪は、「各章末における不孝者に対する天罰」の点で、

・ 本章ではあくまで〈人為〉の範囲で処理されるのであり、この点こそが『二十四孝』をはじめとした先行孝子譚の所与としてもつ天罰の枠組（奇跡・非現実性）からの決別であった。

・ 作品は、予見不能な浮世の実相を現実的レベルで描きえ、またそれぞれの立場の人物を（典型的に）描く機能

を獲得しえた。いってみれば、これは天の物語からの離脱であつて、すぐそこに町人物世界が待つてもいた。本章は、血縁である親に対する孝行の様態のみを描くことをめざす仮名草子期の孝道世界から全く離脱している好例といえよう。

とみて、従来の孝子説話の型を脱した本話の「浮世の実相」と「孝／不孝」の形象化を評価している。立道は、本作品の序文「夫くの家業をなし禄を以て万物を調へ教を尽せる人常也」を「現代における孝」とみる谷脇理史の解釈や、篠原進の「町人物につながる道筋を認めていく解釈」にも言及しつつ、本作品の視点は法制度を含めた当代的文獻にみられる倫理観や「家業」意識に基づくとする。

このように先行する諸論考では、主に「母親」に対する「兄嫁の孝」「妹娘の不孝」「長男たちの孝」を基準に、兄嫁の孝行譚的な解釈、妹娘側から読み解く見方、母親の発言の当否、作品世界全体の現実性など、それぞれの位置と意味を読み解こうとする姿勢が窺われる。演劇的興味が新たな生活教訓なのか、その人物の行動や発言と孝不孝の一話の構成をいかに評価すべきか等で、諸論の解釈が分かれている感がある。

前出の森の論考が指摘した「粗雑」という語は、後に掲げる巻五の一の本文の注釈にもみられる。嫁の孝側、また妹娘の不孝側の対比的な位置、視点人物の発言や行為の各々が雑然として見えることが「粗雑」といわれる一因かもしれないが、本論では、その叙述が何をもちたしているかについて、改めて考えてみたい。それは、本文に記述される事件の一方で進行していることが、ある種の省略的な表現で暗示されている可能性について、である。

二、「筑前の国福岡の町はづれ」の意味

本話は次のように始まる⁽¹³⁾

桃や柿や梨の子は蓮の葉商 七月十三日の曙夕暮は麻柯の焼火して世になき玉を祭る業の哀は秋なり。露に涙に両袖の湊筑前の国福岡の町はづれに辻屋長九郎といふ舟のり有しが。ながく筋骨をいたませ次第に老の

浪立よはりて。彼岸に眠るごとく尽ぬ。其跡を後家椿を取て世帯を能持かためける。子式人有しが惣領は長八郎次は娘にて小さんと名付し。是には入智を取けるに長八と心をあはせて親の時にたがはず大廻しの渡海を乗て独りの母親をふたりして介抱ける。

日本古典文学全集『井原西鶴集二』所収の『本朝二十不孝』本文校注者の松田修は、本話の本文の注の中で幾つかの疑問を掲げているが、まず冒頭の部分で以下の指摘をしている。

「両袖の湊筑前の国福岡の町はづれに」

この続きぐあいは少しおかしい。袖の湊は博多であり、福岡はそれに隣接してはいるが別の都市である。袖の湊すなわち筑前国福岡の町とはいえない。「袖の浦のある筑前国の福岡の町」とすることにも無理がある。博多は商業都市、福岡は政治都市として明瞭に分かれていた。福岡では荒戸町あたりが、船着場であった。

同じく巻五の一の本文の

手を合して詫事さてもく利なく。銭が一文御ざらぬと入物を明て箱崎の明神を誓文に入て二人の者の帰る迄との断漸々に聞分四十五六人掛乞逆ても済ぬ事に。

についても、松田は「箱崎八幡宮（現福岡市箱崎）」は、福岡からいえば博多をへだてた糟屋郡にあった。同じ海難の神ならば福岡と同じ筑紫郡に住吉神社が聴こえている。このへん、福岡、博多にかなり詳しい西鶴（一代男、一目玉鉦）としては、粗雑である。これに対し、『日本永代蔵』巻四の二では、博多の金屋某は、住吉大明神を誓言に入れており、自然である」と注する。

「博多は商業都市、福岡は政治都市」という松田注は、「袖の湊」なら辻屋は博多なのか、福岡側なら荒戸あたりか、辻屋が福岡なら誓文は住吉神社が相応しいのでは、といった疑問を呈しているようである。だが、冒頭の本文をみるところ、「露に涙に両袖の湊」が露・涙→両袖↓袖の湊、歌枕「袖の湊」が「筑前の国」と、縁語的な連想の働きが次の語句を引き出していると考えられる。この「両袖の」から「袖の湊」へ、のように部分的に語を掛けつつ連鎖的に語句を続けていく方法は、西鶴浮世草子の本文に多く出現する特徴的なものである。例えば、代表的な

和歌の例、

おもほえず袖にみなとの騒ぐかな唐船の寄りしばかりに

鳴く千鳥袖の湊をとひこかし唐舟の夜の寝覚めを

等からの連想をもとにした、西鶴浮世草子の本文の他の例では

筑前の国。袖の湊といふ所は。むかし読める。本歌に替り。今は人家となつて。看棚見え渡りける。

〔西鶴諸国はなし〕貞享二年刊、卷三の四「紫女」

のような「筑前の国」↓「袖の湊」という連想の続き方もある。言語感覚の点からみて「箱崎の明神」の箇所も、「二文御さらぬと」「入物」(↓「箱」)↓「箱崎」といった連想的な繋がりからの連句的な修辭、軽い「付け」の程度で発想された虚構なのではないかとみられる。

一方、商業都市博多と「明確に分かれていた」政治都市の福岡、と松田注が指摘する点は、本文の次の箇所の表現から窺える。

其中に博多より通ひ商人味噌酒の売懸とらではかへらじと。商人跡に残り角なき鬼の貞つきして埒があかぬと鍋釜ぬくと。広敷に座を組いてつとなく眠の出。人の物云も幻に聞ぬ。

四十五六人の掛乞のうち一人残ったのが「博多より」の「通ひ商人」であり、博多から「福岡」の辻屋に通つて来たので、辻屋は博多の商家ではない。博多からやや遠くにある辻屋に来ていた商人は、ふと疲れてうとうと眠りこんでしまったのではないか。位置関係的にみても、この話は「筑前の国福岡の町はつれ」にある辻屋を舞台としているとみるべきだろう。

この辻屋の亡父長九郎は「舟のり」を「家業」とし、その死後「其跡を後家楫を取て世帯を能持かためける」とある一方、息子たちが「親の時にたがはず大廻しの渡海を乗て独りの母親をふたりして介抱ける」と記される。後家すなわち母親が辻屋の舟問屋の店舗の営業の「楫取り」としても、「大廻しの渡海」を実働的に担うのが長男の長八郎と妹婿だったといえる。

「大廻しの渡海」即ち遠隔地を航海する廻船業といえば、中野等¹⁶、高田茂廣¹⁷らの指摘では、福岡では寛文期より少し前から、福岡藩領の五ヶ浦の廻船すなわち弁才船（千石船）による大坂・江戸への遠距離輸送が始まっており、宝暦頃の前田家文書「五ヶ浦廻船方記録」が、先祖由来の商業権の主張で廻船業の経緯を次のように記しているとする。

慶長年間 殿様御当国江御入部被為遊 以後御用之御荷物船百石積位より三四百石積迄間 数拾艘御座候分
残島・今津・浜崎・宮浦・唐泊以上五ヶ浦御預け被為成

私共先祖之者共より右船を持伝 御米御用並江戸御参勤御用物 尚又長崎御用等運漕相勤来り 其後御登米等も相増候故 追々廻船も大船に相成 大坂御登米之儀は五ヶ浦廻船中請負被為仰付
唯今迄相続御用相勤来居申上候¹⁸

慶長年間、黒田家が筑前に入城して以来福岡藩の「御用之御荷物」の運送を五ヶ浦（残島（能古島）・今津・浜崎・宮浦・唐泊、現在の福岡市西区）の船頭が数十艘の弁才船で担っていた。その後も黒田藩の参勤交代時の運送、大坂への御登米や、江戸から東北・北海道への福岡藩米の輸送等、藩の「御用」を「請負」勤めてきたという。その最盛期は正保年中（一六四四～四七）から宝暦（一七五一～六三）頃といわれ、「平均千二百石を超えた廻船を六十艘近く保有」（前掲高田論考）したとも伝えられている。

寛文十二年（一六七二）以降の河村瑞賢の西廻り航路開拓がエポック的な事業であり、当時の各地の水運商業活動が新興の経済社会動向の関心事であったことは想像に難くない。「福岡の町はつれ」の廻船業の辻屋と「博多より通ひ商人」の設定もまた、福岡藩領の五ヶ浦のような廻船業等の話題を得た作者の「大廻しの渡船」の「家業」の着想から創作された可能性が考えられる。

浮世草子作者としての井原西鶴が「全国各地に旅をし、その見聞を作中に生かしている」（谷脇理史「西鶴——その作品に見る旅」²⁰）とする説は、古くは伊藤梅宇『見聞談叢』（元文三年（一七三八）刊）や真山青果、暉峻康隆²¹らの論考にもみられ、また森田雅也は、西鶴が「流通に用いる北前船に代表される船旅を利用」²²していた可能性をも

指摘する。近年は、作者が実体験で得た情報だけには必ずしも限らず、例えば『一目玉鉾』（元禄二年（一六九〇）刊）掲載内容と当時の資料の地方情報との関係を分析する市川光彦⁽²⁴⁾、倉本昭⁽²⁵⁾らのように、文献による情報、各地の俳諧師たちとの交流と伝聞（西国では筑前の中村西国⁽²⁶⁾ら）による情報の収集といった見方も示されており、その可能性も高い。いずれにせよ巻五の一の場合、「現実の西鶴（テキストの外に実在する西鶴）ではなく、受容コードから形成された作者であって、いわば、テキストに内在する作者⁽²⁶⁾」においても、西国の廻船業の動向に対する当代的な関心が窺われるのである。

三、「大廻しの渡海を乗て」と、結末の表現の意味

辻屋の家業の貧窮は、本文では次のように描かれていた。

思へば波の上の仕合せだめがたく。内証のあしきは阿波の鳴渡より渡りかね。盆も正月も宿にて年を取事なし。此節季も留守ながら借錢の測はゆるさず。売懸したる人々庭に立ならび節供前とは各別いやでも応でも百貫に塗笠一蓋母親せがむにぞ身も置所なくかなしく。もたらぬ智子を恨みせめて断り文なり共下しぬれば。おのく様の御腹の立ぬ事ぞ。手を合して詫事さてもく利なく。

始めの「思へば」以降、廻船業の「波の上の仕合せ」の航路の危険や「さだめがた」き不確定さ、商売の不安定さが強調される。また「内証のあしき」「渡りかね」から続く「盆も正月も宿にて年を取事なし」では、節季行事の準備はもとより掛売の支払時にも航海の働き手が家に戻れないという「家業」の状況が示される。この場面では「世帯」を固める店の後家の母親が、やや誇張的な大人数の「四十五六人掛乞」を相手に「二人の者の帰る迄との断」箱崎明神の誓文を立てている。「身も置き所なくかなしく。もたらぬ智子を恨みせめて断り文なり共下しぬれば」も、この窮状に陥った後家Ⅱ母親の視点からの記述である。ここで節季にも関わらず「断り文」もなく家に「もたらぬ」「智子」たちを母親が恨む、という部分は、先の「心をあはせて」「独りの母親をふたりして介抱ける」という孝子

的な表現との差異を感じさせる。あたかも『世間胸算用』の「借錢しやせんこはれて出違ちがふ」(巻二の二)大晦日のように、予め息子たちを不在にし居留守を演技して掛乞を帰らせるような家業ではない。長期の渡船でやむなしとはいえず、店に残された母親が正直に、遠く離れて不在の「もとらぬ智子を恨」むのは、まさに『本朝孝子伝』巻下末「中原休白」の「未ダ嘗テ一日モ与レ父離居セ、非レ有ルニ外事」則チ常ニ在テ側ニ愉愉如タリ也」⁽²⁾のように常に親の傍らで尽くす「孝子」とは異なる、「波の上の仕合せだめがた」き家業ゆえの息子たちの一種の「不孝」の要素を、母親が嘆く表現とみることができる。

さらに続く部分の母親の「嘆き」の言葉は心内語のようだが、他人がいると意識する時には恥も見栄もあり声に出して言わないようなことを、母親が「他人がある共しらで」愚痴つてしまい、商人が「人の物云も幻に聞」いた、という場面と解釈される。不在の息子たちを恨んでも解決しない状況のやるせないさと、盆の供養も日常生活もままならぬ貧窮で、「此国こくにに我ほど浅あさましき者ものまた有べきか」「是より先に命消きへたし」という否定的な口吻の心情が吐露される。その嘆く母親の目の前に、まさにちやうど「色科いろしなやりて」「踊をうのならし」をする妹娘小さんが現れたことが、母親の堰を切ったような非難の言葉の放出となり、小さんが雪踏を投げ付けて寢室に戻る、という行為を招いたと考えられる。この娘と比較される兄嫁の「女の鑑かみにも末々すくま迄しらすべき」献身が語られることを含めて、配置された「饒舌」な母親の言葉が饒舌であるほど、母親と娘との心理的乖離は高められる。

この場面において「爪切つまきり持て立」思いつめた母親を制止した嫁が、さらに手道具を盆の供物に替え、目撃した掛乞の商人が感涙し銭と小粒銀を恵むエピソードが加わると、娘の「不孝」はそのままで、嫁のささやかな「孝」と幸運が状況を救う話の方向へと移っていく。ここまでが「此盆前」の夜の辻屋の窮状の事件の話である。

ここで、前述した筑前五ヶ浦の廻船業等を話の種として福岡の辻屋が設定されたとみて、解釈を考えてみたい。辻屋の場合も「慶長年間」頃から藩の「御用之御荷物船百石積位」等を運送していたのが父長九郎の時代であり、子の長八郎たちが今の辻屋の「大廻まはしの渡海わたりを乗て」務めていると想定してみる。後継者の長八と智たちは「心をあはせて親おやの時にたがはず」働いている。だが、「辻屋」は貧窮していた。福岡藩の御用船としての遠隔運送に着眼

した商機だが、その家業は「波の上の仕合せだめがたく」、天候や海流の条件で急な変更も多く、期日までの発着も確実ではない不安定なものだったといえる。律儀に務めても、運送賃料稼ぎの場合は特に到着遅れ等による運送上の違約金の発生や、遭難による舟の損傷等で、伴う損失も少なくない。商運は天任せの、おぼつかない家業というのが、運営者の実感であっただろう。

しかし子の長八郎たちの代の寛文年間頃の「今」、西廻り航路開拓前後の頃には、以前より安全度を増した海上輸送網が整備され、弁才船で全国を航行する廻船業者の商業活動が拡大し、活発化し始めていたはずである。

時津風静に日和見乗覚て。西国の壺尺八寸といへる雲行も三日前より心えて今程舟路の慥成事にぞ。世に舟あればこそ一日に百里を越。十日に千里の沖をはしり。万物の自由を叶へり。

『日本永代蔵』巻四の二「心を暈込古筆屏風」

この頃以降の廻船業者は単なる運送賃料稼ぎに留まらず、寄港する各地で地方の特産物を買取り販売する「買積み」の取引も始まっており、元禄頃には筑前の廻船も「大量廻米に適合的な大船化」の傾向を示す。「辻屋」も長期の航海で巨額の利益を得た可能性がある。出発から帰港まで航行が一年程はかかる「親の時にはならず」の廻船業、と記されながらも、しかし息子たちの運航の安定性と取引の状況は、父親の頃とは変化していたのではないか。「波の上の仕合せだめがたく」という言辭は、文字通り「運命的な」(前掲平林論文)かつ「予見不能な」(前掲立道論文)家業の不安定さを語る言葉で、覚束なく帰りを待ちながら嘆く母親側の心理の表現でもある。だが「今」の長八郎や智たちの航行が、過去より「舟路の慥」な渡海になりつつあり、さらに言えば、皮肉にも「親の時とたがはず」の商法では貧窮したままだった辻屋の廻船業は、親の頃とは違う商機を得た方法と才能によって、まさしく『本朝二十不孝』序文の文字通り「家業をなし禄を以て」の状況に至り得たのではないだろうか。

巻五の一の本文において、それらは直接に描写されてはいない。未だに「思へば波の上の仕合せだめがたく。内証のあしき」という、先代の時と同様に家を守る後家の視点が本話の前半を覆っており、その母親が息子たちの「買積み」取引の高利を予期している様子はない。その貧窮の視点で盆前の夜の場面は展開し、不在の息子たちが時に

は恨まれたりもする。家に残された母親、嫁、妹娘たちの知らない、息子たちの成功は、実際に彼らが帰港してようやく判明することになる。

この巻五の一の長八郎と聾が「親孝行」か、といえ、確かに一年近く長い不在となる廻船業を「家業」とする働き手には、前述の『本朝孝子伝』や『二十四孝』のような、昼夜常に親の傍らで献身的に能く仕える孝行が、最初から不可能である。巻五の一の事件では、「親の時とたがはず」と記述される息子たちの「家業」の性質が、実際は親の時のままではなく変わりつつあるように、「孝」も旧来の孝子譚の孝のままでないことが窺われる。その上で、家に残る兄嫁の「孝」と妹娘の「不孝」の対比的な事件が、ほぼ演劇的に可視化されているのではないか。

本話の孝子側である辻屋の兄の長八郎たちと、不孝者側の妹娘子小さんとは、親の世代の頃から変化する「今」の子の世代の感覚という点が、実は共通しているということもできる。そのことは、森銃三のいう「誠を以て仕へる嫁女」と「邪慳に当る娘」とを「対立的に描く」「孝／不孝」の構図とは別の、もう一つの暗示的な構図ともいえる。それは、孝子伝的「孝」を期待する親の世代と、現実的な家業観の子の世代との間の「親／子」の意識の微妙な乖離ともいうべき構図であり、あるいはそれが孝子譚的な予定調和の枠組みを危うくする可能性もなくはない。だが、当時の現代小説——浮世草子作品の読者にとっての本話は、「女の鑑にも末々迄しらすべき」「孝あるゆへに天のあたへ」等の仰々しい孝子譚の常套句の行間から、むしろこの現実的な親子関係の感覚の方を、感得できるテキストだったのではないだろうか。

孝あるゆへに天のあたへ。うき所を凌きしうちに。長八も聾とひとつにおもふまゝなる仕合にて二たび国もとにかへりて家さかへし。娘と娼の善悪を語れば長八胸にすへかね此家を追出し聾には外よりよろしき人のむすめを子にもらひてはじめのごとく夫婦となし。なをかはらずして生の松千よもと契りをこめける

本文は表現上、兄嫁の「女鑑」的な「孝」が母親を慰め窮状を凌いだ「演劇的」場面の人情話として展開している。それは確かに「孝子譚」的ではある。だが、先行研究が典拠と指摘する『二十四孝』『張孝張礼』の場合、例えば御伽草子『二十四孝』が、孝子譚の常套句的に次のような結ばれ方を見せることと、比べてみたい。

彼無道成者も、兄弟の孝義を感じて、友に死を免、か様の兄弟古今希也とて、米二石塩一駄と与へたる。是を取りて帰り、いよく孝道をなせるとなり。

巻五の一はこのような結び方をせず、兄嫁の「孝」から幸運を得た「此盆前」のささやかな事件を、長八郎と賀たちの「おもふまゝなる仕合」の結末が凌駕していく。息子たちの成功は一家の貧窮を救い、不孝な小さんは「長子の執つた処置」（森銃三）の「胸にすへかね此家を追出」す勘当により懲悪される、「不孝者の敗北、孝行者の勝利」という結末について、先行研究が諸説を呈示していた。しかし、この結末が暗示するものは、それだけではないと考える。「賀には外よりよろしき人のむすめを子にもらひてはじめのごとく夫婦となし」という本文は、廻船業の成功で巨大な富を得た辻屋が、繁栄し始めた家業に相応する「よろしき人のむすめ」を賀と添わせ、おそらくはその経済状況の家との「縁組」の新嫁が（過去、辻屋の兄嫁の婚礼の際もそうだったように）相応の「衣類敷銀手道具」を携えて来るであろう、という現実的な状況をも暗示的に連想させる。本作品の巻一の二「跡の剝たる婢入長持」の「身代不足な」き商人の「女子縁付」では、こうも記されていた。

手前よろしければ兼て手道具は。高時絵に美をつくし衣装は御法度は表向は守り。内証は鹿子類さまく調へ京より仕付方の女を呼寄。万事おとなしく身をもたせ。

森銃三の指摘する、実の妹娘を追放する家族の情の如何も記されてはいないが、「孝」の問題でいえば、おそらくその後富裕となったはずの長男夫婦、賀夫婦たちが「孝子譚」のように「いよく孝道をなせるとなり」という書き方でもない。妹娘が追放され、再婚した賀夫婦が「なほかはらずして」「千よもと契りをこめける」という新しい賀夫婦の結婚後の辻屋の繁栄が語られて終わる。あの兄嫁が貧窮の中で親里にも内証を隠し、手道具を失ってまで銭に替えた「女鑑」のような「孝」や、感心した掛乞が僅かな銀を恵んだ行為も、過去のものとなり、その先の次世代の莫大な経済的成功へと変わっていく。「なほかはらずして」と言われるほど、妹娘の行方も、あの夜の兄嫁の献身や「孝なるゆへに天のあたへ」の孝子譚の世界も、そのままに留まらず、辻屋の繁栄へと移っていったような予感が伴うところも、本話の興味深さとして感じられる。

先行の論考や注が「粗雑」と評していた巻五の一だが、その指摘には、孝不孝とも過去の状況のままに「留まり続けない」進行する事件形象の志向と、暗示的な表現の叙述の方法が影響しているとみられる。本話が「孝子譚」風に見えて、何か違和感が残るとすれば、どこか当代的な状況の観点で事件が俯瞰され見透されている、その視線が原因ではないかと考える。造型された話は、一方向的な教訓性の枠に収まらない余韻を与える。

谷協理史は「西鶴の読者などは、社会的にみれば幾分かは親不孝者に属する人たちが大多数、『二十不孝』の教訓的言辞に心をうたれたりすることはまずありえず、それらは話の最後に付属する形として、気楽に読みとばされるものだったと考えざるをえない⁽³⁾」とした。この谷協の説に対し、『本朝二十不孝』の教訓性を主張し反論する論考もある。だが、本話巻五の一には、『本朝二十不孝』序文の「夫くの家業をなし禄を以て万物を調へ」と一見似通いながら、その教訓を文字通りなぞるだけでは読み解けない「含み」がある。不在の兄と聲が辻屋の新しい実質的商運を担う、表には「見えない」逆転的成功の現実が進行していると考えると、表に「見える」母親と妹娘と兄嫁の演劇的展開の一夜がいかに「女鑑的」な常套句の「もつともらしさ」を帯びてくる。教訓的言辞がその「効果」として用いられていることを読者が感じる時、描かれるものが相互作用的に諷刺的な感覚をもたらす。「親／子」の世代間の意識の差の問題は、『本朝二十不孝』においては巻一の二「大節季にない袖の雨」の文助と文太左衛門、巻四の二「枕に残す筆の先」の鰹屋の姑と嫁をはじめ、様々な形で現れており、設定される人物関係にリアリティを与え、事件の要因として「孝／不孝」の構図を単純化させない方法的な意識を感じさせるものでもある。

杉本好伸は「二十四孝」的世界には絶えて見られない、親子関係の様々な実際のケースが、西鶴の目には具体的に現えていた、ということである」とし、「しかし西鶴のそうした創意は、必ずしも正しく理解されなかったようである」と指摘する。孝か不孝か一方向的に読むことができない場合もあり、それらは各々の人物や視点によって事件の状況が多角的な現実として見えるように造型された「はなし」の方法によるのではないか。この方法は巻五の一だけではなく、『本朝二十不孝』の各話において、一様ではなく企てられていると思われ、再検討が必要であると考える。

注

- (1) 江本裕・谷脇理史『西鶴のおもしろさ——名篇を読む』（勉誠出版、二〇〇一年三月）
- (2) 森銃三『西鶴一家言』（河出書房新社、一九七五年十一月）所収。初出『もんが』（一九六六年八月）。以下、本論で引用する本文箇所用の字は現行の字体に改め、傍線は引用者が便宜上付している。
- (3) 徳田進『孝子説話集の研究 近世篇』（井上書房、一九六三年十二月）
- (4) 有働裕『作品の研究史・「本朝二十不孝」』（『西鶴と浮世草子研究』一、笠間書院、二〇〇六年六月）
- (5) 佐竹昭広『本朝二十不孝の「小さん」』（『国文学解釈と教材の研究』二七巻十三号、学燈社、一九八二年九月）
- (6) 井上敏幸『本朝二十不孝の方法』（『語文研究』三十一・三十二号、一九七一年十月）
- (7) 平林香織『本朝二十不孝』に描かれた孝』（『日本文芸論叢』五、一九八六年三月、『誘惑する西鶴』所収）
- (8) 大塚健臣『本朝二十不孝』巻五試論』（『日本文学論究』五五、一九九六年三月）
- (9) 早川由美『本朝二十不孝』の不孝娘譚——娘と世間をめぐって——（『名古屋大学国語国文学』八一、一九九七年十月）
- (10) 立道千晃『本朝二十不孝』の孝道観——同時代意識からの再検討——（『近世文芸 研究と評論』三八、一九九〇年六月）
- (11) 谷脇理史『本朝二十不孝』論序説』（早稲田大学『国文学研究』一九六七年十月）
- (12) 篠原進『日本永代蔵』の主題』（『弘前学院大学国語国文学会誌』七、一九八一年三月）
- (13) 本論における西鶴作品本文の引用は『定本西鶴全集』（中央公論社）に拠り、現行の用字に改めた。
- (14) 宗政五十緒・松田修・暉峻康隆校注訳『井原西鶴集 二』小学館、一九七三年一月）
- (15) 注（14）に同じ
- (16) 中野等『近世北九州における廻船業の展開——筑前下浦廻船の場合——』（『日本水上交通史論集二』『続日本海上交通史』文献出版、一九八七年九月）
- (17) 高田茂廣『筑前五ヶ浦廻船の諸記録』（『福岡市立歴史資料館研究報告』十三、一九八九年三月）、同『近世筑前海事史の研究』（文献出版、一九九三年九月）。及び、福岡市博物館歴史展示室企画展示『No.384「筑前五ヶ浦廻船展2」（二〇一一年四月～六月）参照。ただし宝暦二年（一七五二）以降、福聚丸（浜崎）、竹丸（残島）等の遭難と国外漂着事件があり、また他の地域の廻船業千石船の興隆に押されたこともあり、商勢が衰退したという。
- (18) 注（17）高田氏研究報告（一九八九）を参照し、現行の字体に改めて改行を加えた。

- (19) 『北前船と新潟——廻船と日本海海運の時代——展』(新潟市歴史博物館、二〇二四年七月～九月) 同展図録解説より。なお、『武家義理物語』巻五の五の舞台・下関の事件と海上輸送路の関係について、拙稿「歴史的「残影」の方法」(『香椎潟』五四、二〇〇八年十二月)に論じた。
- (20) 谷協理史「西鶴——その作品に見る旅——解釈と鑑賞 至文堂、一九九〇年四月」
- (21) 真山青果「西鶴の輪郭」(『西鶴随筆・西鶴語彙考証』講談社、一九五二年二月)
- (22) 暉峻康隆「西鶴の人と生涯」(『西鶴 評論と研究 下』中央公論社、一九五三年二月)
- (23) 森田雅也「西鶴『一目玉鉾』と「海の道」——島国文化としての視点から——」(『島国文化と異文化遭遇——海洋世界が生んだ孤立と共生——』関西学院大学出版会、二〇一五年三月)
- (24) 市川光彦「井原西鶴研究」(右文書院、一九九二年十二月)
- (25) 倉本昭「西鶴『一目玉鉾』における下関の地名について」(『梅光学院大学論集』五五、二〇二二年三月)
- (26) 中嶋隆「認識」と「表現」をめぐって——谷協理史先生の西鶴研究『西鶴と浮世草子研究』三、二〇一〇年五月
- (27) 勝又基編『本朝孝子伝』本文集成(明星大学平成二十一年度特別研究費「説話文学の中世と近世——『本朝孝子伝』を中心として」研究成果報告書、二〇一〇年三月)所収、『本朝孝子伝』貞享二年板(東北大学狩野文庫本) 影印参照
- (28) 注(19) 同展図録解説、及び酒田市「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間く北前船寄港地・船主集落く」(日本遺産通信、二〇一八年三月)
- (29) 注(16)に同じ
- (30) 日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店、一九五八年七月)
- (31) 谷協理史「『本朝二十不孝』の教訓の意味——作者の姿勢と読者の問題——」、『雅俗』五、一九九八年一月、『近世文芸への視座——西鶴を軸として——』(新典社、一九九九年十一月) 所収
- (32) 杉本好伸「日本における「二十四孝」享受の一展開——西鶴『本朝二十不孝』の創意をめぐって——」『日本のことばと文化』溪水社、二〇〇九年十月